その演劇部、最前線———

自由暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その演劇部、最前線――――

【Ｎコード】
Ｎ０２７２Ｚ

【作者名】
自由暇人

【あらすじ】
主人公『如月奏月』は、とある事情から山々に囲まれた『白萩学園』にやってきた。が、そこは個々の抱く信念が武器や超能力となって現れる場所だった。
そして起きる爆発。そこに現れた男になされるがままに連れられて、やってきたのは……演劇部部室！？
１人の少年から始まる学園バトルコメディー――――、開幕！！

プロローグ【オペレーション・リクルート】前編

白萩学園

周りを山々に囲まれて存在している、広大な敷地を持つ『学園』
である

この場所には、少々おかしな所がある

――人の曲げない思いが、能力として具現化する――

武器として具現する事もあれば、事象として現れる場合もある

そして未開のそれを、当然のごとく教師達は恐れた

十分に凶器となりうるものを、生徒が自由に振るえるのだから

だから学園側は、対策を用意した

『生徒に信念を持たせない程、教育すればいい
　さすれば、秩序は保たれる』

誰かのその発言は、瞬く間に教師陣への救いの言葉として広まった

そして、創立より１５年

ほんの少しの例外を残しながら、学園は平穏へと向かっている―

―――

◇◆７／４　Ｗｅｄ　０８：１２　白萩学園指導棟２Ｆ　廊下◆◇

さっきまでいた部屋が、爆炎に包まれる。
ほんの数メートル後ろの光景が、赤と黒に変わる。
前を走る男に連れ出された理由が、なんとなく分かった。
理解しても、俺はただ走るしかなかった。
走って、後ろの脅威から逃げることしかできなかった。
「ったく、”生徒会”の連中もやることがえげつなくなってきたなぁ……」
先を行く男が悪態をついている。
『センパーイ、そんな愚痴はいいですから、とっととそこから脱出してくださ～い』
「テキトーだなぁおい！！　ワンコ、お前それでも司令官か！？」
『まぁまぁ。そこはどうでもいいんで、とっとと”転校生”を安全に連れて来てくださいね～』
「作戦無しでかよ！！」
さっきもらった通信機から声がしている、が。
……しっかし随分とまぁ、悠長にやってるなぁ……。
これって一応、学園への反逆ってことだろ？
しかも捕まるとヤバいって、資料に書いてあったような気が……。
てか、こうしている間にも後ろからは追手みたいなのが来てるし。
多分、さっき部屋を爆破したのもあいつなんだろうなぁ。きちんと髪を揃えて、メガネかけて、いかにも優秀な学生ですって顔してやがるのに、やることはえげつない……。
「止まれ！悪ガキ共！！」
ほらね、追手だった。
自分が燃やした部屋の事なんて気にとめてないご様子だ。
「おっと”転校生”、後ろ振り向くなよ。教育に悪い事で定評の

ある副会長様だ」
「聞こえているぞ、反逆者！！」
怒声が聞こえる。
後ろにいる副会長様とやらは、やはりというかなんというか……
…酷くご立腹なご様子だった。
「ところでお前さ、運動神経に自信はあるか？」
それは前を走る男から俺に向けられた、唐突な質問だった。
「は？まぁ、一応それなりに……」
「じゃ、いけるか」
答えてすぐに、質問者は唱える。

「突貫突破乾坤一擲！！！――――トランス！」

活発な声で叫ぶとともに、現状に2つ、変化が起きた。
1つは、
「這え、火蛇（ほのお）！！」
炎が音無く地面を伝って蛇のように迫ってきた事。
数は4つ。
それぞれがそれぞれの軌道をもち、走っていた俺達に追いつかんばかりの速度で迫ってくる。
こちらは真面目副会長の”能力”だろう。
もう1つは、俺の横にいるヤンキー君の腕に、
「パイル、バンカー……か？」
人の右腕に付く代物ではないとは思うが、そうとしか思えなかった。
槍のような先端。
それと不釣り合いな巨大な胴体。
こんな構造をしている武器は、経験上パイルバンカー以外に思い浮かばなかった。
それが何もない所から腕に装着されていく……、いや。腕の上

に構築されていくのも、随分と不可思議な光景だった。
……なるほど、これが”能力”ってやつか。
俺の人生で一度もそんなものを見たことが無かったのは、ただの偶然か、当然か。
それだけ非常識な光景が、この場所には広がっていた。
「ブチ込んでくぜ！！」
掛け声とともに、彼の腕に創造された能力（パイルバンカー）が向かった先は、地面だった。
コンクリートに軽くヒビが入る。
と、そこへ。
「砕け！！」
破砕機は音を立て、二度目の衝撃を送る。
コンクリートの塊は罅を広げて行き、そしていとも簡単に俺達の周りの地面は崩れ落ちる。
蛇のように伝ってきていた炎も、伝う地が無くては行き場を失うだろう。
そこまでは理解できる。
それを計算して地面を落とすのも、まぁそれなりに利口的な判断なのだろう。
が……
「っぉぉおおおおおおぉぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」
建物の二階から一階へ自由落下、それもいきなり。
空中へ放り出される俺と、ヤンキー能力者。
が、取る行動は自然と似通っていた。
「「よ、っと、っと。ほっ」」
俺もそいつも、もちろんというように落ちる瓦礫を使って足に負担をかけないように着地。
漫画とかによく出てきそうな、しかし実際には難しいであろうことを、普通であるかのようにしてしまう。
……運動神経良ければ出来る、ってレベルのものなのか？これ。

いや自分が出来てるからなんとも言えないが。
ちなみに、向こうの馬鹿は右手のそれのせいで随分と不格好な動きになっていた。（それでも瓦礫渡りは出来るのだからはたまた凄いのだろうが）
「……おいおい”転校生”、お前何者だよ」
「……ただ運動神経がいいだけの転校生ですよ」
「嘘こけ。普通の転校生にあそこまで出来るかってーの」
「地面いきなり落としたのはあんたでしょうに……」
と、場を茶化す会話に、通信機から声が割り込んでくる。
『あの～センパイ、私さっき『安全に連れてきて』、って……』
「実力試しだよ、実力試し」
『トオル、さすがに地盤落としはやり過ぎだと思いますよ』
今までの可愛らしい声とはまた違う、別の声が入ってくる。
今度は男の声だった。
「あ～、大先生。すんません。ちょっと焦ってたもんで」
『まぁ、それはいいですけど……立ち止まっている方が危険だと、僕は思いますよ』
「「あ……」」
ふと俺も声をあげてしまった……
そして、向こうの階段の方から、燃える蛇（ほのお）が見えた。
俺は隣にいる彼に冗談半分で訊く。
「……もう一度、地面崩します？」
「何言ってんだよ、ここ一階だぜ……」
「ですよねぇ……」
「……」
「……」
しばしの沈黙の後、
「「逃げろ！！」」
判断は共に早かった。
初対面の割に、俺はそいつと意気投合していた……ような気が

する。
が、パイルバンカーなんて代物のせいで俺たちの歩みはさっきより遅く。
「逃がさんぞ！」
向こうの男から来る火蛇（ほのお）は数も増え、速さも上がっている。
あぁ……、本格的にまずいだろ、これ。
俺、こいつらみたいな能力なんて微塵も持ってないぞ……
「おいワンコ！姫はどうしたんだよ！！」
『安心してくださいセンパイ。すぐそこに』
直後、俺たちと炎の間に割り込む影があった。
それは小さな影だった。
白と黒を基調としたゴスロリ風な服装。
それを身を包む小柄な体格。
腰まで伸びる長い黒のストレート髪。
あと両の腕に抱えたネコのぬいぐるみ。
ゆったりとどこからか出てきた彼女は、俺たちを一瞥した後、ゆっくりとした動きで炎と対峙する。
対峙する、とは言っても少女と炎。
酷く圧倒的だ。
なので一瞬止めようかとも思ったが、やめておくことにした。
彼女が炎に向けて、静かに袖に隠れた左腕をさしだしたからだ。
一件意味不明な行動、更には自殺行為にも見える行為だが、なんとなく場の流れ的に察していた。
そしてその推察は、彼女の静かで透明な声で、確信へと変わっていく。
――――――そっか。こいつも、――――
「怠惰なる守り手より来たれ、――――トランス」
――――――”能力者”か。

俺はふと、思った。
……なるほど確かに、こいつは姫だ。
この光景を見れば、さっきから彼女が姫と呼ばれる理由をなんとなく察することが出来る。
それは、先程まで地を這い迫ってきた炎。
こちらに向かってきていたその火は、彼女の前に立った瞬間に恐れをなして消えて行く。
おそらく盾の”能力”であろう。透明な障壁らしきものが見える。
その光景はまさに王と賤民のようで、酷く圧倒的だった。
そして俺は理解した。
自分をまるで王のように見せる、小さな女の子。
容姿だけでなくこの能力を持つからこそ、彼女は姫と呼ばれているのだろう、と。
（ま、彼女があんな容姿じゃ無けりゃ、姫じゃなくて女王とか呼ばれるんだろうけどな）
夢も希望も無い話である。
「くっ……、イレギュラーか！」
向こうはどうやら相当悔しがっているご様子で、追撃は諦めたようだ。
「じゃ、急ぐぜ”転校生”！！」
俺たち二人は、姫を置いて『指導練』と書かれた建物の外へと出る。

◇◆◇◆◇

校舎内に残された二人は、静かに牽制し合っていた。
（さて、どうしたものか）
副会長は思考する。
彼女の能力（イレギュラー）は絶対の盾。
炎による攻撃だろうが拳の一撃であろうが、完全に防いでくる。

そのバリアが今、廊下を隔てている。
もしくは、彼女自体立方体が防いでおり、見えないが見える透明な盾は、その一面にすぎないのか。
一面だけならいいが、四方を囲んでいたり立方体だったりしたら厄介だ。
――――が、どちらかの判断もつかない。なら……
副会長は右手を後ろ手に構える。
そして一気に、前に広げる！
「燃えろ！！」
彼の掌から、炎の波が発生する。
廊下を覆うほどの火は、まっすぐに目の前の少女に向かっていく。
容赦は無い。
（どうせこの攻撃は当たらないんだろうな……、だが！！）
火元の人間はそれを知っている。
が、これが本命ではない。
「穿て、火槍（ほのお）！！」
左手で作った新たな炎は、槍とも針ともとれる形状であった。
長さは1メートル程だろうか。それが3つ、副会長の背後に現れる。
行け、と指示すると同時、炎はそれぞれまっすぐに窓の外へ向かう。
パリン、と割れる音がして、破片が棟外へと落ちて行く。
が、校舎の損害は気にしない。
破損は気にせず違反者は捕まえろ、というのが教師陣の言い分であった。
生徒会はただ、それに従う。
（校舎を壊してでも――――、）
そのまま何処かへ飛んでいくと思われた火は、空中で静止する。
そして向かう先、”能力”の対象が、3つ全て棟内へと変わる。
そう、

（――違反者は捕らえる！！）

中にいる、少女に向かって。

炎が飛ぶ。

プロローグ【オペレーション・リクルート】前編（後書き）

初投稿で至らない所多々ありますが、これからも宜しくお願いします！！

感想ご意見などございましたら、レビューとか私のブログに書き込むでも何でもよいので、くれるとありがたいです。

ていうか募集します！！アドバイスとかくれると、特に感謝です！！

作者ブログ『とある高校の文芸同好会のブログ』

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｃｒｕｓｅｉｄａｒｓ７５７

プロローグ【オペレーション・リクルート】後編

日の光を受ける中、俺はパイルバンカーを右腕に付けたままのそいつに先導され、グラウンドまで走る。
ここで少し安心した。
靴のままでいて良かった……と。
っと、随分と俺も余裕だな……。
ま、それも当然か。この程度で焦る程、俺はださい人生送ってないもんな。
いや～、昔もいろいろあったなぁ。あの時なんて――――――、
「ちょ～っと、まぁ～ったぁ！！」
人が感傷に浸ってる最中にうるさいな全く……
と、目に意識を戻してみると、目の前の大地に立つのは、ちっちゃい子供だった。
まぁ、風貌に合わない戦斧（バトルアックス）なんてものは見えるが。それも両手に。
斧をそれぞれ肩に担いでいる幼女は叫ぶ。
「いはんしゃは、せいぎのしどーを受けるのです！！」
意味分かって言ってんのかなぁ……。なんか不安になる。
「ちっ……やべぇな」
ところが、隣の男は危機を感じているような顔をしている。
「どうしてです？俺にはおもちゃを持ったガキにしか見えないんですが」
一応初対面な事を思い出し、丁寧語で聞いてみる。
いや言ってる事は失礼極まりないが。
「ガキっていうな～！」
「あいつぁ、”生徒会”の戦闘部門。あんなちっこい柄だが、やることはえげつねぇともっぱら評判だ」
「ちっこいっていうな～！」

「なるほど……」
「むしするな〜！」
まぁ、とりあえず……状況はヤバいそうだ。
相手はわざわざ戦うために生徒会なんかに入っているってことは……、生徒会とやらがどれだけの組織なのかは知らないが、ちょっと危険度はあるらしい。
ましてや超能力じみた人間が溢れるこの学校の中で、”戦闘部門”を名乗る程なのだから。
「大先生！戦闘部門のちびっこに足止め食らった！ちょっとやべぇかも」
通信機を使って、大先生とやらに話しているようだが……
「大丈夫ですよ。僕がどうにかします」
返しの声は通信機からではなく、俺たちの後ろから聞こえた。
「おわっ！なんだよ大先生、いたのかよ……」
振り返ってみると、そこには大きな背丈の人間がいた。
……全く気付かなかった。
いつの間に……
「初めまして”転校生”。僕は演劇部部長の……」
言いかけて、彼は口を止めた。
そして次に彼から出た言葉は、少々早口気味だった。

「我を貫く確固たる刃を、———トランス」

部長と名乗った彼の腕には、鞘に入ったままの日本刀が。
と、それを視認した直後に、彼の姿は見えなくなる。
「っ、何処に……」
直後。
ガキン、と金属がぶつかり合う音がする。
音源は……後ろか！
予想通りだった。

日本刀を持ったさっきの男は、ペチャパイ幼女の斧を上手で受けている。
しかも刀を抜かずに鞘で。
……速いな。対応も、速度も。
「不意打ちとはいただけませんね、戦闘屋」
「だって、そろそろチャイムなるもん。いそがないと！」
「成る程……。生徒会の人間が遅刻したら、大変ですもんね」
「そーそー。だからさ……」
女の子は斧を構えなおす。
「とっとと、その子こっちにかえしてくれないかなぁ！！！」
二つの斧で挟み込む勢いで、双斧は部長へと襲いかかる。
「トオル、転校生連れて離れてください」
「あ、おう！……転校生！」
その言葉を合図に、俺は闘う二人の戦闘区域から離れる。
そして見た。
日本刀一本で、どうやって迫りくる斧二本を防いだかを。
彼は左手に持つ日本刀を右手で鞘から抜き、居合切りの勢いでまず一方の斧を防ぐ。
「いった～い……」
防ぐというより弾いたという表現の方があっているだろうか。止める目的の一撃は、明らかに相手の腕にダメージを与える勢いだった。
そして次に逆手持ちしている鞘で、もう一方の向かってくる斧を下から叩くことで、軌道を逸らす。
見事なものだと思う。
一本の刀だけで駄目だと瞬時に判断し、かといって避ける判断をしなかった。
鞘まで使って、相手の攻撃を完全に凌ぐ。
自身の刀への絶対の自信。
今の攻防は、そんな感情を受けるものだった。

そして。
斧使いは今の攻防を見て思い、
（さ～っすがに、かんたんには行かないか……。いったんはなれよっと）
距離を取って構えなおす。
その行動に対し、刀使いも立て直す。
左手に持つ鞘を腰に掛け、右手に持つ刀を心中線に構える。
先の攻防で沈んだ体勢を元に戻し、全てをスタンダードへと戻す。
そして静かな集中へと身を委ねて行く。
（……あと3分って所ですかね……）

◇◆◇◆◇

この現状を見ている男が二人。
トオルと呼ばれている男と、転校生であるところの俺。
「あと3分だな」
トオルは腕時計を見ながら呟く。
「？」
「タイムリミットだよ」
「タイムリミット？」
『あの……そんなことより、右手のそれは収めないんですか？』
「ん？」
視線は互いにトオルの右腕に向いた。
「あぁ、これか。確かにな」
今まで彼にまとわりつくようにあった鉄塊は音も無く、ただ光の残滓を残しながら消え去っていく。
「さて、と。俺達はこの戦いでもゆっくり実況しようぜ」
「逃げないのか？」
『転校生さん。うちの兄さんの戦い方は、見といた方がいいと思いますよ』

「そーそー。第一あと3分もないんだ。逃げるだけ損ってもんだぜ」
……確かに。
気配の無さといい、あの動きといい、ただ者ではないのは既に分かっていた事だが。
それが能力などではなく、確かな実力の上にあるのだとしたら……
「この戦い、見とくのもいいかもな」

◇◆◇◆◇

その頃、『指導棟』内では。
「……」
目の前を覆っていた右手の炎を消し、副会長は今まで見えなかった目の前を見る。
そうして、一言。
「……最高の結果だ」
消えて行く炎の残り滓の向こう。
煙く曇る、視線の先。
そこには――――
「だが、最悪の結果だ」

何事も無かったかのように、無傷で彼女は立っていた。
いつも通りの冷ややかな目で、こちらを見据えながら。
感想は一つだった。
「ということは、盾は一面ではないのか……」
予想外でなかった事に関しては御の字だが、結局のところ状況打破には繋がりそうにない。
あまり当たってほしくない予想が、当たってしまった。

（さて、どうするか……）
次の策を考える。
と、その時。

◇◆◇◆◇

体の小さな女。
体の大きな男。
やけに対象的な二人の間には、緊張感が漂っていた。
「で、時に戦闘屋さん。こんなにゆったりとしてて、大丈夫なんです？」
「えー、あせってせめたって～、たおせないじゃん☆」
……よく分かってらっしゃる。
体格の大きな男は、冷静に状況を分析する。
（でもまぁ、時間を稼いでも勝つのはこっちだし。別にこのままでもいいんですが……）
多分そうはならないんでしょうね――――、と心の言葉は続く。
その刹那後、状況は一変する。
先手を打ったのは斧。
彼女の攻撃は左側からの足払い……いや、足刈りとでも言うべき一撃だった。
低く沈んでからの一撃。
まずこの技で、相手の体勢を崩す――――。
それが彼女の狙いだった。が、
「え……」
結果として、その目的は果たせなかった。
「とりあえず、ここであまり余計な手の内は曝さない事にしました」
避けた男の手の中に既に刀は光の残滓となって消えており、その彼の姿も斧から数メートル先にあった。

「トランスなしで、わたしのオノを……」
「えぇ、避けました。そしてあと2分ほど……、避けきるつもりです」
「……人のじつりょくを見きわめられない人って……」
一拍置いて、
「ザコいってかいちょーが言ってたよ！！！」
二つの斧が速さを帯びて部長を襲う。
ここからの動きはもはやどこか神がかっていた。
少女の次手は右手の斧による袈裟掛けの一撃だったが、その軌道を読んで男は彼女の懐に入り込む。
本来の武術的スタイル、或いは剣術的スタイルならば攻撃のチャンスなのであろうが、彼はそこから攻撃を入れる素振りをせず、ただそこに立っているだけだった。
「なんのっ！！」
次に来る攻撃も、その次に来る攻撃も、優雅にかわす。
右に避け。
左に避け。
しゃがみ。
最後には両腕をポケットに入れたまま攻撃を避けていた。
「なんでっ、なんでっ……」
「そりゃあ、攻撃が単調ですし」
迫りくる斧を避ける最中、部長は語りかける。
「右の後に左、左の後に右って分かっていれば、後は初動で軌道を読めばいいだけの事。多分あなたと武器との体格差的に、トリッキーな動きは出来そうにないですしね」
「ぐっ、ぬぬぬ……。ならっ、これならぁ！！！」
彼女は一連の動きを止めて、両斧を空にかざす。
そして上空から、思いっきり落とす。
二つの斧は重力の力を得て、一気に対象を襲う。
……避けきれるタイミングじゃありませんね。

彼はそう判断し、攻撃を受け流すことを選択する。
だが――――。

◇◆◇◆◇

キーン、コーン、カーン、コーン、……
終わりの鐘が学園中に鳴り響く。

◇◆◇◆◇

チャイムの音を聞いて、ふと俺は呟く。
「なるほどねぇ……」
確かにこれはタイムリミットだったのだと。
今になれば、どうして気付かなかったのだろうかと思うほど、単純な話だった。
彼女は生徒会の人間。
遅刻するのはその立場上まずいのであろう。
だから、このチャイムはタイムリミットと同じ意味を持つ。
この時間制限のうちでしか、闘えない。
彼女自身も先程言っていた。チャイムが鳴るから急がないといけないとかなんとか。
「なんで気付かなかったんだろうな……」
今までチャイムという慣習が身にしみていなかったからか？
いや、ここで原因を探る事に意味は無いだろう。
深く考え込んでいた脳内の情報（ウィンドウ）を消し、目の前の現実（デスクトップ）を見る。
「これはかしにしとくからね！！覚えてろなさいよ！！べ～～～

〜〜」
いつの間にか攻撃を止めていた彼女は、かわいく舌を出し、小さな子供はその身にそぐわぬ斧を消し、グラウンドを去っていく。
その数瞬後、指導練より、
「くそっ、駄目だったか……」
悪態をつきながら副会長が去るのが遠目に見える。
……なるほど、向こうもタイムリミットか……
その後に続いて、さっきのゴスロリ少女が姿を現す。
彼女はゆったりとした足取りでこちらへと歩いてくる。
「姫、無事でしたか？」
部長が声をかける。
彼女は何も言わず、ただ首を縦に振るだけだった。
多分、それが彼女流のコミュニケーションというやつなのだろう。
「……さて、行きましょうか」
その一言で、部長に先導されて、俺達はこの場を後にし、木が生え茂る森の中へと歩みを進めて行く。
「っと、一つ言い忘れてた」
さっきからトオルと呼ばれていたパイルバンカー系男子は、ふと転校生を振り返る。
そして笑みを作って、ただ一言だけ。
「ようこそ、白萩学園演劇部へ」
演劇部……？と素直な疑問が、転校生である俺、『如月（キサラギ）　奏月（ソウゲツ）』には浮かび上がっていた。

◇◆◇◆◇

ため息一つ
そして思い返す
朝早くから山登りをして、てっぺんで見た朝日の光景
そこから下っていって、ようやく見えた「ようこそ白萩学園へ」
と書かれたアーチ
教員に部屋に案内される途中に見た、まるでロボットのように動く生徒たちの姿
そして先刻までの反乱の様子を
ふと首を後ろへ傾ける
さっきまでの戦乱の爪跡が見て取れる
一言だけ呟く

「記録、……しねぇとな」

呟いて、ゆったりと歩く
自らの使命の為に

プロローグ【オペレーション・リクルート】後編（後書き）

プロローグ終了です。
前編・後編のキリが悪くてスイマセン……。

ご意見ご感想、募集しております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0272z/

その演劇部、最前線―――

2011年12月2日01時51分発行